

ライリア ヌール サフィトリ
インドネシア出身
東京外国語大学 総合国際学研究科 修士課程

1. 日本留学が教えてくれたもの

日本に留学した外国人学生にはひとり一人自分なりの「日本物語」がある。体験する「日本」もそれぞれ多少異なると思う。私の「日本物語」は、ある意味、味が染みる旅だっただろう。

1年間坂口財団の奨学生としての生活を含め、合計7年間ほど日本で留学生として過ごした。7年間という長い月日が経ち、日本は既に自分的一部となった。17歳で初めて来日した2014年のあの日の自分は、今思えば、とても若かく、キラキラと光る瞳を持った子供だった。好きなことだけに夢中だったあの子は、振り返ることもなく「夢」を地図にして、ただただ走り続けた。留学当初の子供だった自分は、時が経つにつれ、少しずつ大人になっていくことが実感できる。日本で、その成長過程を過ごすことができたのは、とても贅沢な経験である。

私にとって、日本への留学は「成長の大変さ」を教えてくれた人生のチャプターである。数えきれない失敗や悲しみ、楽しい思い出や感動した出来事と共に、日本でしか経験できない感情や視点をたくさん学ぶことができた。

まず、留学することで、今までの自分がどれほど小さかったのかということを気づかせてくれた。インドネシアにある小さな田舎町に育った自分は、井の中の蛙のようで、外の世界に何があるのかが見えなかった。今まで当たり前のように思った常識や習得した知恵、何気なく教わられた社会のルールや人の考え方、今まで見えていたものが全てではなかったことを、留学が教えてくれた。この視野の外に、数え切れないほどの人々がそれぞれの生き方で頑張って

いることを実感し、自分も自分なりのやり方で頑張るようになった。

そして、この留学のおかげで、自分が大好きな日本とのつながりをたくさんくれたと思う。今まで留学で出会った人々は、インドネシアで日本語を勉強するだけでは出会えなかつた人々であった。出会った人々からたくさんの会話や思い出、そして大切な考えを共有できたと思う。このつながりを一生大切にし、これから的人生において、大きな学びとなるだろう。

それだけではなく、この留学は、国では絶対にできないアルバイトをたくさん経験させてくれた。そこから自分でお金を稼ぐ大変さ、そしてお金の大切さをたくさん教えてくれたと思う。そして一番重要なのは、どのような仕事であっても、人に敬意を持つことを忘れないことであった。これは、今までたくさんのアルバイトを経験したことでの学んだことである。

このように、7年間の留学経験はこれから的人生の道標になるだろう。17歳で一人日本に留学し、この7年間に渡る生活が色々と教えてくれて、成長させてくれた。通常、自分の国では経験できることや勉強出来なかつたことをこのようにたくさん達成できたのは、とてもラッキーだと思った。決して簡単な道のりではなかったが、一瞬一瞬がとても愛おしいと思った。親元を離れ、自分でちゃんと色々考えられるようになった。17歳の自分が想像出来る範囲を超えて、この世界がどれほど広いのか、自分がどれほど小さかったのかを実感するようになった。

今の自分は留学でできていると言えるだろう。この一つ一つの経験の葉が大きな枝に育ち、いつか、自分を立派な木に成長させてくれ

ると信じている。

2. 奨学生期間中にできたこと・将来計画

2020年4月から博士前期課程の2年生になり、そして初めて坂口財団の奨学生にもなった。去年は、新型コロナウィルスの影響で、1年間の様々な予定が崩れ、大学での研究も、勉強も、アルバイトも、普段の外出も、友達との遊ぶ時間も、旅行も、ありとあらゆる生活の「通常」場面が見えなくなり、全人類において、とても混乱した1年間となっただろう。

自分の場合は、4月に2年間ほど働いたアルバイト先の店が潰れ、アルバイトができなくなり、普段生活するための収入を稼ぐことができなくなった。大学の授業も、完全オンラインになり、大学の図書館も閉鎖になってしまった。そのため研究にも影響を及ぼし、再調整するのに時間がかかってしまったことをよく覚えている。去年の春は、今まで体験した春と大きく異なり、ちょっと苦い後味を残した季節になった。

しかし、人間というのは学習する生き物であることは間違いないのだ。マスク着用やソーシャルディスタンス、オンライン授業や在宅勤務などに、自分も少しずつ慣れていくようになった。新しいアルバイトも見つけることができ、研究も再調整し、調査もオンラインを通じ、実行できるようになった。

自分の研究は、インドネシア人の元日本語研修プログラム留学生への質的調査をテーマに、留学生が来日した後のソーシャルネットワークとアイデンティティーを中心に調査する研究である。対象者一人一人に直接対面し、2回に渡るインタビューを行う予定であったが、春学期に計画の方向を少し調整し、全てのインタビューを対面で行わず、一部オンラインで実施することになった。調整の結果、元々8人の対象者を設けるはずの研究だったが、4人の対

象者に変わった。しかし、対象者は減ったものの、4人の話をより濃厚に問い合わせることができ、個人的に満足できる研究になったと思う。

一方、春にアルバイトを失った自分だったが、初めて大学でアルバイトをすることになった。今まで、大学でアルバイトをする機会はなく、いつも大学の外で働くことが多かったが、今回は新しい挑戦に挑み、インドネシア語学科のティーチングアシスタントを務めることになった。このアルバイトを通して、今まであまり交流の機会がなかったインドネシア語学科の学生とたくさん交流し、自分の国の社会状況、そして自分の母語を改めて見直すことができた。今まで自分が当たり前のように話す言葉も、他人にとっては全く異なった世界に見えただろう。このように自分の国と日本のつながりに直接関わることができ、大変貴重な経験となった。

そして、この1年間で個人的に学びとなったことは「家にいる時間」である。新型コロナウィルスが拡大する前は、アルバイトや学校で毎日が目まぐるしく、ほとんど家にいる時間がなかった。休みの日も、旅行が大好きで、いつも友達とどこかに行き、一人でゆっくり何かを楽しむことがなかったのは事実である。2020年は、ゆっくり自分を見直す機会を与えられたような気がした。在宅勤務のアルバイトとオンライン授業の合間に、昔好きだった本をまた手に取るようになり、途中で諦めた日記やエッセイもまた改めて書くようになった。

財団からも、エッセイの執筆を毎月送ることになり、その月によってどのようなものを書くかを考えることも楽しい一時となった。とても些細な楽しみであったが、混乱の状況の中、このように一人で些細な幸せを見つけることがとても大切だと気づかせてくれた時間であった。

博士前期課程2年生の1年間を無事に終え、卒業後の将来計画として、帰国をすることにな

った。本来、博士後期課程に進学をする予定だったが、新型コロナウィルスの勢いが止まらず、母国にいる両親が心配になり、帰国を決心することになった。

この先、何があるのかを全く予想ができないこの時世では、正直予定や計画を立てることが一番怖いことである。帰国後、インドネシアの状況により、今まで勤めたかった先生の仕事や経験したいこともできなくなる可能性がある。そのため、具体的にどのようなものに手につけたいかは述べることができないが、一つ確かなことは、どこにいても、学ぶことだけは必ず続けて行きたいと思っている。たとえどのような学びであっても、人間である限り、知識を得ることが幸であることだと信じている。いつかまた日本に戻り、博士後期課程に進学ができるその時まで、頑張っていきたいと思う。

2021年2月